

「日出づる処の國印象記」

ブルース・S・ファイラー

放送教育開発センターではかねてからアメリカのPBS・アダルト・ラーニング・サービスと提携し、教材の共同開発研究を目指してきた。このファイラー君は、PBSの責任者であるブロック女史のアシスタントを務める青年である。エール大学の大学院でコミュニケーション論を専攻し、機会を得て来日、日本のある大学で1年を過ごした。この文章は、その1年間の印象を綴ったものである。海外からやってきた青年の目に日本の大学はどう映ったかが興味深い形で描かれている。ファイラー君は、特に放送教育開発センターの研究開発事業に関心を寄せ、将来は放送教育開発センターと協力して研究を行いたいと考えている。あるいは近いうちに海外特別研究員という形で日本に迎えられ、彼の念願がかなう日が訪れるかもしれない。

友人が（私を）ロック・コンサートによんでくれたのは、私が日本に来てから3週間経った頃でした。「来日以来、勝手違いの事だらけで、やれやれ、やっとこれで勝手のわかった世界に還れる。」^{かえ}と思い私はほっとしたものです。

確かに、周囲の情景は見慣れたものでした。友人と一緒に明りを落とした大きなホールに入ると、そこはクリスタル・ボールがくるくると回り、ネオンサインがキラキラと輝き、「ダンス！ ダンス！ ダンス！」と、英語の文字も踊っていました。その下に蠢いているのは無慮数千人のティーン・エイジャーのギャル。そのファッションはバギー・ブラウス（だぶだぶのブラウス）にタイトスカートという、皆（歌手の）マドンナのような出で立ちで、その周囲にはブルージーンにネクタイを締めた野郎共が群がっていたのです。群衆に身をすり込ませ、「（歌手の）マリーン」に対する歓声に私も声を合わせました。彼女は背のスラリとしたシンガポール出身の歌手で、唄っているのはアメリカ・ヒットチャートの最新のナンバー。しかし、周囲で嬌声を挙げていたギャルが

その好奇心をそそる一層珍奇なものを見つけるには、ほとんど時間を要しました。あたりの男の子よりも、マリーンの歌よりも、^{ギャル}彼女達の胸をワクワクさせたのは、何とこの私でした。たちまち60人程のギャルが脇に退いて私を取り囲む人垣が造られ、その中心に私は取り残されてしまったのです。ギャルは声を揃えて叫びました。「ダンス！ ダンス！ ダンス！」。最初はポカ^ンと見とれているだけでしたが、その内、くすくすと笑い出し、最後にはガイ^{ジン}と踊ろうとする厚かましいのが何人かこの輪の中に踏み込んで来ました。

その時私がいたのは、東京の中心部のあるホールの本真中の人垣の中でした。この日本のまんまん中で私はこの文化に溶け込もうと必死の努力を試みていた次第なのです。

しかし、日本に溶け込むのは難しい問題でした。ある種のトラブルの発生を私は予想していましたが、この障害は皮膚の色の違い位だろうと軽く考えていました。私の皮膚は白く、髪の色は明るく、そして背が高い（188 cmもある）ことは事実です。しかし、そうした表面的な相違を除けば、私も日本人も、互いに似た者として認め合えるものと期待していました。しかし、私の予想は何れもハズレてしまいました。人垣の中心に立たされて初めて、格好は似ているものの私と日本人ではその考えに大きな隔たりがあることを私は思い知らされたのです。確かに、コンサートの聴衆のファッションもダンスも、そして（演奏されている）音楽さえもアメリカのものでした。しかし、聴衆は日本人なのです。

周りを取り囲む人々が、まるで鏡に映った私自身のように見えてきました。一見すれば、私も彼らも同じように見えます。服も顔も同じ。しかし、同じ現象はそこまでであり、類似性は単なる私の幻想に過ぎなかったのです。

日本滞在中ずっと、「あの人垣に参加する」という捕え所のない目標を私は追求して来ました。時にはうまくいったこともあり、それは今も心暖まる思い出として私の胸にしまい込んであります。しかし、最終的には、私は（「あの人垣」から）疎外されたのです。何故ならば、私は日本人ではなかったからです。私の思い出、考え、そして希望も紛れもなくアメリカ人の価値観に基づく

ものであることを私は知らされました。日本はいわば、私を映す鏡の役割を果たしたわけで、日本の友人の眼を覗き込んでそこで私が見たものは、紛れもない私自身の姿でした。日本を追い続け、そして見つけたのはアメリカ……という次第です。

日本行きの飛行機に搭乗した際、私は不安で一杯でした。日本語は何ひとつ知らず、日本の習慣に関する知識も耳かき一杯程度。しかし驚いたことには、日本に到着してみると私は賓客待遇でした。アメリカ人が外人と会う場合、アメリカ人は慎重な態度で臨むのに対し、一方、日本人が外人と会えば、彼らは外人に敬意を払ってくれます。（後になって気付いたことですが、こうした礼儀正しさは西洋人に対してのみ向けられています）。大学に入学し、（逗留先の）家族に溶け込むとすぐに、アメリカでの私のいつもの生活パターンがこちらでも蘇えって来ました。しかし、類似性は表面的なものであり、私はただのゲスト（お客さん）に過ぎなかったのです。世界のどの国を見ても、国家とは、国民、習慣、そして社会の単なる集合体を越えたものです。国家とは、それそのものが歴史の集積のもとで、人々が共通の不安と期待を中心として一定の場所にまとまって住んでいる集団にすぎません。日本人にとっては、日本並びに日本的な事物に対する情念が生きがいとなっています。私はこうした感情を説明はできますが、理解はできません。この情念こそが、「あの人垣」を形成しているものであり、同時に私を疎外しているものなのです。

日本で通^{かよ}った大学で当初私は、大学の運営構成に違いはあるものの学内の雰囲気は共通しているものと予想していました。ところが現実はその逆でした。クラスの構成方法は同じですが、教授方法は全く違うのです。皮肉なことですが、日本の教育制度そのものが日本人の創ったものではないのです。学校教育を小学校、中学校、高校、それに大学と四分割する現行制度は占領時代に始められたもので、これはアメリカの制度をモデルとしています。これだけを見れば、日本は西洋化されていると言いたくなりますが、現実はそうではありません。制度の構成はアメリカによく似ているものの、内容は全く異なっています。

大学教育についても、なるほど、幾つかの共通点が見られます。学生と教授

があり、試験が実施され、クラブが（学内に）結成されていることなどがそれに該当するでしょう。しかし、この学生、教授、試験、クラブなどの持つ意味合いはアメリカとは全然違ったものです。まず、学生から始めましょう。私が会った限りでは、日本の学生にとって大学は学舎でもなければ将来の職業プランを設計する場でもなく、ただのレジャー・ランドにすぎません。学生も学生も学業そっちのけで余暇のクラブ活動に熱中している。私もアメリカの大学でクラブに所属はしているものの、日本の学生のようなクラブ中心の生活は過していません。そもそも、大学に対する基本的な考えがアメリカでは違うのです。大半のアメリカ人学生にとって大学とは、それぞれの専門分野を決定する時期です。高校時代に数学、理科、歴史等の一般科目を学習し……勿論、「塾」になど通う筈もなく……そして大学で、学習の焦点を絞るわけです。経済学、生物学、もしくは哲学といった塩梅に特定の分野を選択しますが、これは通常、卒業後の仕事の基礎となるものです。

日本の学生にとって、大学教育は職業設計にアメリカ程の重要性はありません。その代わり大学とは、高校の厳格な管理教育と大学卒業後の激烈な生在競争との中間にある息抜きがよの場ではないでしょうか。塾通いで心身を消耗し、「入試地獄」の重圧をくぐり抜けた後では、学生には休息が必要なのです。かくして、大学のカリキュラム（履修課程）は一般的なものに薄められ、学習を進める際にも余り厳しいものは求められなくなるわけで、こうした学問的な緊張感の欠除こそ、日本の職場の要求にふさわしいものと云えましょう。何故ならば、企業は一般教育を受けた卒業生を採用して、然る後に企業内で研修を実施し個々の企業が理想とする社員の鑄型にハメ込むからです。これに対しアメリカでは、大半の卒業生は大学在学中に身につけた技術をもとに雇用されます。

私が通った日本の大学でまず最初に気が付いたのは、日本人とアメリカ人の学習態度の違いでした。アメリカの高等教育の基礎は対話であり、学生と教師の日常の対話がこれを形成しています。然かるに日本の高等教育は独演会であり、対話のない一方通行に終始するだけです。つまり、先生が講義し学生がこれを拝聴するわけです。英語には、日本語の「先生」に相当することばはあり

ません。類似の意味を有する英単語の何れもが、日本語の「先生」に込められているものと同様の敬意や服従を意味するものではありません。わからない点があれば教師に質問し、納得できるまで教師の答を鵜呑みにしてはならないと私は指導されたものです。授業中に私が教授の説明に納得しないばかりか、時には公然と反論するのを知って友人達は大きなショックを受けていました。これはつまり文化面での両国の大きな差を示しており、日本では先生を権威とみなし、私は先生を個人関係の相手と考えるこの相違を物語っているのです。アメリカでは、教師も含め権威者といえども誤りを免れないものと了解されており、個人には権威に挑戦する権利があるものと私は考えています。これに対し日本人は確立された階層制度の枠内で生きていかなければならないのであり、この体制の頂点には権威者が君臨しています。教師の場合は特にいえることですが、この体制内では権威は常に正しいのです。

アメリカ人の生きがいは論争にあります。アメリカ政治制度の基本はイデオロギーの拮抗にあり、裁判制度の根幹は法廷における原告・被告双方の対決です。従って小学生の頃より、自己の意見を涵養しその防御に努めるようアメリカ人は教育されます。これに対し日本人は指導者（目上の人）の意見に従うように教育されます。

この違いが最も明瞭に現われていたのが試験に対する態度ではないかと私は思量しています。私の受講した近代日本史の授業（英語による講義）には、何人かの日本人学生がアメリカ留学を前に英語の勉強に生かそうと受講を登録していました。試験数日前、予想される出題に備えて模範解答を作成する友人の作業を私は手伝っていました。予想問題のひとつに明治維新の重要性を問うものがあり、私の友人はこの歴史的事象に対する著名な学者の賛否両論（明治維新の積極的な評価もしくは否定的な評価）をまとめて3ページにも及ぶエッセイを書き上げていたのです。彼の解答は完璧なものでしたが、彼自身の意見は何ひとつ述べられてはいませんでした。

「君は一体、（明治維新の肯定・否定の）どちらの意見に賛成なのかね。」私の問いに彼はこう答えました。

「わからない。そんなこと、考えたこともないよ。」

「教授も、この問題に対する君の見解に興味があるだろう。君自身の意見を述べるように教授も望んでいるだろうに。」

「しかし、僕は一介の学生に過ぎないんだよ。」彼はこう嘆息したのです。私の友人は自身の意見は持っているものの、学者の見解の方がより意義のあるものと考えているようでした。しかし、私は違います。他人の意見よりは自身の意見を開陳したい。しかも大抵の場合、私の意見が正しいものと確信があるので、自説を裏付けるため権威ある学者の見解を私はまず引用しません。

ちなみに、私の友人は試験で優秀な成績を納めましたが、私は教授から受けた評価は厳しいもので次のようなコメントが添えられていました。「第三者の意見（の記述）が必要である」、と。

私が通学した日本の大学の雰囲気は懐しくも私の心を和ませてくれました。というのも、体育館といい、図書室といい、そして教室さえも、アメリカの大学とよく以ていたからです。

学生食堂の食事値段が安いものの不味いことでは同様でした。しかし、大学は全く異なったりズムで機能していました。クラブ以外の場所では少数の人にしか会えず、キャンパス内を異様な服装（ファッション）で闊歩する人も極めて稀であり、不平不満の声もほとんど聞かれませんでした。何よりも、どの学生も同じ身体つきをしていたのです。とどのつまりは、毎年3月になればKガイダイ（外語大学）は何百人という社会クローン人間（同一人間の集団）を輩出し、彼らは服装も話し方も同様であり「日本株式会社」の中核を形成する大きな流れに入ってしまうわけです。国家の要求に着実に応えているためのK外大の運営は順調です。企業が求めているのは、一般教養を身につけ、集団の中で効率よく仕事をこなす能力があり、そして、集団のためには個人の生活を犠牲にする学生なのであり、K外大はこうした学生を供給しているからです。

日本の繁栄の理由は、ひとつには、国家の安定と企業の成功を国民が等価視していることによるものであり、更にいえば企業の成功は教育制度の厳格な運

用に左右されています。日本・アメリカの如何を問わず、大学が順調に機能するためには、社会に貢献できる学生を育成しなければならない。日本とアメリカでは社会の要望も異なっているため、いきおい、双方の大学は違ったものにならざるを得ません。日本で通った大学から私が与えられた貴重なものと言え、アメリカの私の母校に対する尊敬でした。アメリカの我が母校が強調する人格の陶冶と思想の自由のレベルの高さに、私は認識を新たにしました次第です。この特性もK外大で強く打ち出されているものほどには優れたものではありませんが、アメリカ社会の要望には一層的確に応えるものではないかと私は思量しています。

日本滞在の日々を重ね日米両国民を分かち大きな相違に目ざめるにつれ、このギャップを埋めようとする人々の能力に寄せる私の信頼も強固なものになっていきました。日本で「ホスト・ファミリー」という個人的な指導者に恵まれたのは実に幸運なことでありました。ホスト・ファミリーのお蔭で、私は箸の使い方、お辞儀の仕方、それに風呂の入り方を知ることができ、日本語による電話のかけ方もおそわりました。私が初めて日本語で電話をかける際、逗留先の「日本の父」は紙に注意事項をメモして私に20分間、それを練習させたのです。

「もし、もし。ブルースです。（一呼吸置く）アンドルさん、お願いします。」私が正しいイントネーションと適切な間^まを身につけたことに「日本の父」は満足し（彼の話によれば、私は余りにも早口でありました）、やっと友人に電話をかけてもよい許しが出ました。しかし運の悪いことには、私が話しかけた途端に対応に出た人は私の声から「ガイジン」であることを察知したため私は「もし、もし」を繰り返すだけでした。練習が必要でした。

「日本の父」は例のメモを冷蔵庫の扉に貼り付け、以来電話が鳴る度に私が対応に出よう命ぜられ、家族の皆は私の応答練習を聞き逃すまいと私の側へ急行したものでした。

電話の応答を始めてから数ヶ月後に、日本滞在中でも最高の興奮を私は味わうことができました。或る日、いつものように「もし、もし。ナガタでござい

ます。」と応答すると、相手は私が外人であることに気付かないで「私の妻」と替わるように依頼してきたのです。つまり、私は「日本の父」に間違えられたわけです。これを機に、誇り高い父親がそうするように、「日本の父」は冷蔵庫のドアから例のメモをはがしてしまいました。

徐々にではありますが、逗留先の父、母、そして24歳になる妹の開放的な大らかさに助けられた私は家族の一員となることができたのです。母とは買物と一緒に出かけ、寿司の調理法を学び、父とは共に酒を酌み交わしカラオケ・バーを訪れ、妹とはダンスに出かけたものです。

ナガター家を通して私が日本について見聞を広めるのと同時に、逆に（アメリカに残した）私の家族を通してナガター家も又、アメリカについてあれこれ学んだのでした。（アメリカに残した）私の家族の写真を「日本の母」は家中にテープで貼りつけ、片仮名で各人の名前を書き出していました。ナガター家の方では十分な知識は得られませんでした。私の方にしてみれば幾分なりとも学ぶ所はありました。2つの家族の中間に立って痛感したのは、私の生活は（それでも）依然としてアメリカ的な価値観に左右されていることでした。

日米両国での住宅に対する考えの違いにはハッとさせられました。ホームスティ先の家庭にはオーブンも無ければセントラル・ヒーティングもありませんでしたが、アメリカの大半の家庭ではこの2つを備えているほか、電気皿洗機や電気乾燥機も保有しています。これは両国における生活上の優先順位の違いを反映したものと私は判断しています。アメリカは広大で平野部も広いため、必然的に住居もクルマも大型化し多くのアメリカ人が広々とした個人の空間を満喫することが可能となり、ひいては、個人の快適さと幸福を優先することになります。これに対し、日本の国土は狭く孤絶した島国で、ちょっとしたことで影響を受け易い。そこで国民の安全を確保するため、日本は国の経済的安定を優先し個人の私的な幸福の充実は後廻しにしたのです。従って日本の家庭では台所用具には低い優先順位しか与えられないわけです。しかし、「日本の母」にとってこれは全く問題にもならないことでした。毎日、母は限られた狭いスペースで素晴らしい食事を作っており、このことから、種々の制約（悪

条件)にもかかわらず彼女が個人的な快適さと幸福をその狭い台所に見つけることが可能であることがよくわかりました。

日本滞在の日数がのびて行くにつれ、それと気付かない内に如何に深くアメリカ文化が私の身体に浸み込んでいたかを知り私は幾度も驚いたものでした。例えば、私はプライバシーと何も無い開放された空間に慣れ親しんでいましたが、墨絵を習った際、私はこのことを再確認させられました。

私の母(アメリカの実母)は美術の教師であり、その影響を受け、私も片手に鉛筆、片手にスケッチブックを携えて育ちました。子供の頃は家族皆で母のステーション・ワゴンの後部座席に乗り込んで^{ひとけ}人気の無い公道の脇にクルマを止めては午後のひとときを納屋や乳牛の写生に過しました。こうして私は絵の描き方を身につけていったのです。大抵、私の描いたものはどう見ても納屋には見えなかったし、乳牛も樹木と区別できない程でしたが、それは問題ではありませんでした。そうした絵の中から、母は常に何か採り上げては賞めてくれたものでした。つまり、写実よりも想像力のほうが重要だったのです。

墨絵を始めた際に私は写実的に描くように指導されました。竹を描くには正確な方法がひとつあり、菊の花は菊として決まった色で塗るよう教えられました。つまり、墨絵の学習課程は規制され調整されているわけです。まず筆運びから特定の順序で学習しなければならず、基本の基本であるボーン・ストロークから始め、より高度なものへと技能を高めていくのです。学生は教師の筆勢なぞることができるようになって初めて技術をマスターするのであり、それまでの技術を身に付けていなければ新しい技術を学ぶことはできません。この学習方法は私にとって極めて斬新なものでした。子供の頃は技術よりも想像力の方が大事なものであり、教師の絵の模倣よりも私自身の着想が重要なものでしたからお手本の模写など許されることではありませんでした。このような墨絵学習における教師と生徒の関係は日本の大学のそれと全く同様でした。

教室では権威ある教授が学生の思想を統制し、画室では教師が学生の審美眼の形成を指導する……何れの場合も、教える側に強力な指導力があり、学ぶ側はそれに従うように教育されるのです。

墨絵は緩慢な速度で徐々に描かれていくものであるが、それを調整するペースとそれに伴う儀式の雰囲気はその他の日本の伝統芸術……たとえば茶道などにも共通のものです。硯に墨を押しつけてリズムカルにすれば心も落ち着き雑念が払われ絵に集中できると私は指導されました。最初の内は、これは神秘めかしたおまじないに過ぎないものだ と誤解していたので、この言葉には抵抗がありました。しかし墨のすり出しに専念するにつれ遅々としたものではありませんが、西洋的な芸術観から私は解放され始めたのです。アメリカで西洋的な技法を用いて描くならば、私は己の眼を信じて適切な構図をとることができます。時の経過と共に私は沢山の納屋を描き、無数の西洋画を鑑賞し、西洋的な審美眼を我が物としたのです。しかし今や、私はそうして私が獲得した美術家としての本能を問い直さなければならない状況に追い込まれていたのです。

画用紙の上に鉛筆を置き想像力の導くままに鉛筆を走らせる代わりに、墨絵を描く場合はそのたびに暫時空白の画紙を凝視して白黒及び墨入れ部分と余白の適切な均衡を保つ構図を模索しなければならなかったわけです。或る意味では、それ以前に絵の技法として身に付けていたものを脱却すべく闘わなければならなかったのでもありました。

私にとって墨絵は日本の美学への入口の役割を果たしたわけです。日本の陶芸と生け花の空間にも私はこれと同様の控え目な表現と空間を保存する精神を見て取りました。皮肉なことに墨絵は日本で始められたものではなく、発祥の地は中国です。ここで又、私は一見矛盾と見える事態に直面しました。「墨絵のような中国文化のスタイル(様式)がどのようにして日本化されていったのか」と。その答は日本に対する私の憧憬にこめられています。日本文化は日本国内では極めて優勢な文化であり、そのため外国から輸入されたものさえも(やがては)日本風にアレンジされてしまうわけです。日本人は15世紀に中国から墨絵を採り入れましたが、美術家は本来の中国様式にあった限界を超え日本のものに消化していきました。要するに、中国様式を日本化したわけです。

日本風の画想を生かす一方で、どのようにして日本人は中国の様式を維持していったのか。これは大学についてもあてはまる問題と言えましょう。アメリ

カの制度を採用した日本は、その中（大学の中）でどのようにして日本的な価値観を教授しているのか。この問題に答える為には、鏡の裏側に廻り、日本の人々の「よそ行きの顔」の裏側を覗き込まなければならないでしょう。私の見出した解答は宗教として説明するのが一番わかり易いものと思います。日本は全体がひとつの共同体であり、各人は同一の信念を共有しています。大半の人々が同様の所得、同様の教育（学歴）、同様の服装、そして同様の信念のうちに暮しています。多面性は殆んど見られない代わりに同質性は到る所で目に付くのです。

この宗教の核を成すのが「日本の特殊性」と云う神話です。この神話によれば、日本はその地理的環境と言語の故を以て特殊な国であるとする結論に達するのです。日本人が特殊であるのは、日本人の頭脳だけが日本語を修得できるからだと言われているようです。この「特殊性」と云う排他的な概念は、或る著者によれば「日本教」と呼ばれていますが、その普及に努めるアウトサイダーは日本には殆んどいません。日本人を紐結させているものはこの宗教に対する普遍的な信仰に他なりません。日本人は特殊な民族であると日本人が信じ込んでいるのは、要約すれば、自分達は優秀であると彼らが考えていることに他なりません。

外部のアウトサイダーから見れば日本はさぞやエキゾチック（異国情緒に満ちて）に見えるものと大半の日本人は考えているようです。しかし、私にとって日本は少しもエキゾチックではありませんでした。私が日本で見つけたただひとつのエキゾチックな物は、あろうことか、この私自身でした。ロック・コンサートでの体験が物語るように、日本では私の存在が新奇そのものなのです。私の外見が異なっているという以上に、私が日本の文化に参加しようと試みると大半の日本人はこれに驚がくしました。来日してからおよそ3ヶ月が経過した頃、近所の女性が歓迎パーティーを開いて私を友人に紹介してくれました。彼女が準備したのはサンドイッチにフライド・チキンと、何れも素手で食べられるものばかりでした。（他のパーティー参加者がそうしているように）私も箸でサンドイッチをつまみ上げた所、主催者もその友人もこれを見て一様に驚

かくし聞きあきた文句を並べて口々にほめそやしてくれました。「素晴らしい」「信じられないわ」「箸が使えるの」「あなたは日本人ですね」この言葉には日本人だけが箸を使いこなせるというニュアンスがありました。かくして私はそのパーティーで最高の敬意を払われ、日本人と呼ばれる栄誉に浴したわけです。

私が2本の棒を器用に操ってサンドイッチを口許にまで運べたことに対する純粋な驚きの背後には、この技術は日本人特有のものであるとする考えが潜んでいるのです。大抵の日本人は、日本人だけが箸で食事をする民族であり、更には箸で食事のできる唯一の民族と信じているのです。日本人だけが能く日本的な慣習に耐えられるとするこの思想は箸から酒まで広く敷衍されており、日本文化に溶けこもうとする私の努力に対する大きな障害でした。私が日本語を話し始めた時でさえも（日本語こそは日本人の有する技能の中でも難攻不落の手ごわいものであり究極的には閉鎖的なものです）、人々が驚いたのは私の勤勉な努力ではなく、私の口から日本語が発せられたという奇跡なのでした。これこそ逆説の最たるものと云えましょう。則ち、徐々にではあるものの私が日本の習慣を習得し、私と日本人とを隔てていた障害を取り払うにつれ、私は日本により近づけるものと期待していたのです。ところが逆に私は遠ざけられて、日本人ではないことを痛感させられるばかりでした。

私の理解した限りでは、日本人は世界を文化水準の面から区分して理解しています。日本人はアメリカ人よりも優秀であり、アメリカ人は朝鮮人よりも優秀である、と。このランキングは私がアメリカで受けた教育と著しく対照的なものです。人間は皆総て平等であるとする信念のもとで私は育てられたのです。人種、性、並びに文化の違いに関係なく人間は皆平等であるとするこの理想は普遍的なものであると私は信じていました。しかし日本に来て初めて、これは西洋の価値観に過ぎないことを私は知ったのです。（おそらくこれは天真らんまんでやや未熟な価値観なのでしょう）日本とアメリカではその文化に違いはあるものの同等であるとする方針で私は日本にアプローチして来ました。しかし日本人の見解によれば、両国の文化は異なっており、しかも同等ではないの

です。大半の日本人が、日本の価値観が優れていると考えているのです。マクドナルドや（歌手の）マドンナといった風俗（現象）をアメリカから輸入することはできるが、アメリカの社会的な価値観も同様に採り入れるのは受け入れ難いことと大半の日本人は考えている模様です。

私の驚きは私個人の新発見でもありました。つまり人間の類似性が異なる人々を結合する精神的な連帯の糧となればなるだけ、人間相互の差異もこれと同様に手の付けようのないものであり、最終的にはより説得力の強いものとなるということです。

日米両国民は二つの異なる民族であります。私は他の結論を見い出すことを願っていたのですが、現在はそう信じています。しかしこれは、日本人が夜に入浴しアメリカ人が朝シャワーを浴びるからではなく、日本人は背が低くアメリカ人は太っているからでもなく、ましてや日本人は箸で食事をしアメリカ人はフォークを使うからでもありません。両国民の違いはこのような表面的な相違とは関係なしに、私達が全くかけ離れた国に住んでいるからです。つまり、両国民の人生観には根本的な違いがあるのです。

近所に住む日本人とアメリカに居る私の妹を比べてみましょう。私の隣に住むユーコさんは最近日本の私立高校に入学し、私の妹カリはアメリカで私立高校に通学していますが二人の生活には著しい違いがあります。ユーコさんの学習時間は長く、暗記しなければならないことも多い上、クラブ活動に多大な時間を割いているものの、彼女自身の技能の開発には殆んど時間が当てられていません。カリの場合は学習時間が短い分だけ電話をかける時間が長いものの、ユーコさんとは対照的に集中して自分の個性に磨きをかけています。ユーコさんにとって人生における成功とは、或る程度は、模範的な日本の女性となれるか否かであり、カリの場合は独自の意見と特殊な技能を備えた個人に成長できるか否かで決められています。カリの方がユーコさんよりも人生の選択肢が多いと言えましょう。つまり、職業に生きるか、家庭に入るか、或いはその両方にチャレンジするか、カリは自在に選択できるのです。一方、ユーコさんの方は選択肢の数も少ない上、社会体制への適応を求める重圧をひしひしと感じる

ことでしょう。彼女は、彼女の一族の面目をつぶさぬように行動し、国家に奉仕（それなりの役割を果たすこと）しなければなりません。心の中では、良き日本人にならなければならないことをユーコさんはよく知っている筈です。

日本で暮らしてみた今、私はユーコさんとカリの両方の立場がそれなりに十分理解出来る様になりました。以前ならば私が理解できたのはカリの生き方だけで、彼女の受けている教育こそ価値あるものと信じ込んでいたことでしょう。協力よりも個性の発露が、協調性よりも創造性の方がより重要なものと考えていたでしょう。しかしユーコさんと親しくなった今、ユーコさんにも妹のカリと同じく勇気と自由奔放さが備わっていることを知っていますが、彼女を取り巻く環境はカリ程には、彼女のこのような長所を伸ばそうとはしないでしょう。その代わり彼女には勤勉、謙虚さ、そして（目上の人に対して）敬意を払うことなどが躰められることでしょう。セットとなった何れの価値観も重要なものです。私の意見では、ユーコさんは自身の創造性をもっと伸ばすべきであり、一方カリは集団の中で効率的に働く方法（術）を体得すべきです。カリの歩む道が成熟した人格へ向かう唯一の道だと思っていたのは昔のことであり、現在では日本人の取るもうひとつのやり方の長所も評価できる反面、極端なアメリカ方式の欠点も指摘できます。ユーコさんは云わば、私を映す鏡であり、彼女の生き方の中に私は妹の姿を見出し、それを敷衍すれば、私自身の生き方も発見できると云うわけです。これまでユーコさんの高校生活の意義にふれ、日本の大学やホームスティでの私自身の体験をこれにつけ加えることで、遂に私も日本（の社会の動向や人々の意志決定）を支配する包括的なパターンに気付き始めました。それは、高校時代の勉強等の重圧が大学での息抜につながり、卒業後は就職し、そして結婚して一家を構えるというパターンです。逸脱や例外はあるものの、私が会った日本人の大半はこの枠内で暮していました。大半の日本人は同じ願望のもとに同等の始発点から人生を始めるのでこのやり方が成功に通じるものと想像されます。結婚がその良い例です。日本にやって来たばかりの頃、ホームスティ先の24歳になる「日本の妹」は私に「恋愛結婚」する予定であると打明けてくれたのですが、その頃彼女は見合結婚を進める両親に

逆らっていたのでした。しかし私の日本滞在も終了する頃には彼女は公然と見合結婚する意思をほのめかしていました。この妥協は彼女がオーストラリアで1年間働ける目途がついたからでしょう。これなどは、日本の大半の若者がアメリカの退廃した文化を受け容れているように見えながら、その実は日本古来の伝統ある価値観に戻って行くプロセスを示す好例です。もちろん、変化もあります。日本のホームスティ先の私の妹は結婚後も働く希望を持っているものの、全体としては日本の現行制度に従う心づもりがあるようです。彼女自身は塾通いが嫌いであったに拘らず、子供が通うことは積極的に望んでいるのです。「何故？」と尋ねてみたら、次のような答が返って来ました。「塾は役に立って、それに塾に行くのは日本の（当然の）慣習だもの。」

これは日本全体についても該当することと言えましょう。日本が順調に機能しているのは日本人しかいないからです。明治維新に際して日本は初めて中国文化の影響から脱出して西洋文明をその指標に求め、多数の国民が西洋的な価値観と制度の全面的な採用を要望しました。しかし、それ以外の（少数派の）人々は日本の価値観を維持するためにも西洋の技術のみの摂取を主張したのです。最終的には政財界の指導者は後者の案を採用することで一致したのですが、この遺産は現在なお日本にその名残を留めています。日本とはいわば、若者の能面を着用した能役者が年寄りみた緩慢なペースで舞う姿にたとえられましょう。つまり、若者の能面とは西洋化を進めた日本の社会の外観であり、年寄りみたペースとは、日本固有の形式を重んじる^{スロー}緩徐な動きを指しているわけです。日本を十分に理解する為に私はこの「表向きの顔」の裏側を覗き込む必要があったわけです私のホームスティ先の家族や友人を通して、「ふだん着の顔」もちらりと垣間見ることができました。私にとって日本の素顔を覗く鍵となったのは、「よそ行き」と「普段着」の顔の違いを受け止めることであったのです。普段着の顔には見逃すことのできない程魅力があるものの、日本社会の^{かなめ}要は「表向きの顔」なのです。

日本の社会では協調性、もしくは^{めんつ}面子を立てることが何よりも重んじられる。協調は力となり、また逆に安全を保証することにもつながります。アメリカ人

パワー
も力を求めますが、その本心は結局のところ個人の安全の追求にあります。しかしアメリカ人は集団ではなく自分自身にその力の源泉を求めます。何故ならば、
独立独歩こそアメリカ人の生きがいであるからです。私はひとりで歩むために
来日し、日本人の持つ素晴らしい特質に出会いましたが、その内の幾つかは私の
知らなかったアメリカ人の特質でもあるのです。例えば、私の話し振りは単
刀直入ですが、日本人の（えん曲な話し振りを好む）性格も尊敬しています。
又、出来るだけコンセンサスを作ること努め、対立はなるべく和らげたいもの
です。それに、公的な立場と社会全体の調和を重んじる思想も高く評価され
ましょう。

日米両国の文化に著しい相違があるものの、それでもなお私達は互いに他から
学び得るものがあると私は信じています。何れの社会も完全無欠なものでは
なく、何れかの社会が他方より優れているわけでもありません。日本のナガタ
一家と共に過した体験から、コミュニケーションを緊密なものにするにつれ日
米双方の互いに受ける影響も深まることが証明されています。一方多様性を重
んじるアメリカの価値観も私は今、再評価しています。日本人との出会いを通
じて、私は他者に対する私の信念を自ら検証し変更させました。私の（ホーム
スティ先の）家族も又、私と同様にその信念を変化させました。というのも、
彼らが私と違っていたように私も彼らとは違っていたからです。

私はユダヤ人です。私のホームスティ先の家族はこれまで1人のユダヤ人にも
会ったことがなく、私の信仰には大変な興味を示しました。米国でやってい
たように、日本でも日常の宗教上の儀式を勤めているわけでもなく又、特定の
食品の摂取を禁じているわけでもありません。日本滞在中には幸いにも、ホス
ト・ファミリーに私の宗教と信仰について十分に説明することができました。
アメリカに居る私の両親がマツチョ（過ぎ越しの祝日を祝ってユダヤ人の食べ
る特別料理）さえ送ってくれて、ホスト・ファミリーの父は箱ごと食べてしま
いました。この体験を通じて、日常の個人的なユダヤ人の慣習がナガタ一家に
紹介され、彼らのユダヤ人に対する理解も現在では一段と深まり、ユダヤ人一
般に対し高い敬意が払われています。

こうした文化の相互交流の効果は永続します。私が日本から帰国する前に、ホスト・ファミリーの「私の妹」が1年間に及ぶオーストラリアへの仕事に出發しました。到着してから1週間後に彼女は葉書を寄越してオーストラリアでの新しい家族について連絡してくれましたが、葉書にはたどたどしい英語で以下のように書いてあります。

「私の新しい家族はユダヤ人で、とても気持の良い人々です。台所に過ぎ越しの祝日用のマッチョを一箱を見つけ、それについて早速、家族と話し合う機会を持てましたが、これもすべてあなたのお蔭です。」

異文化間の相互交流が如何に有効に機能するかという格好の例ではないでしょうか。ホームステイ先の妹と両親のお蔭で、日本は私にとって一層身近な存在となりました。逆に、妹の方も私を通じて、アメリカが一層身近になりました。（コンサート・ホールで私を取り巻いていたあの）人垣から勇気をふるまって一步前に踏み出し、日米両国を隔てる橋の中間まで歩み出て私を迎えたお蔭で、ナガター家も又、私から様々な得るところがありました。

日本について思い出す度に、いつもそこに（人々の）サークルが目に浮かぶのです。私が日本で最も高く評価したいのは、人と人を結ぶサークル（集団）の団結力であり、ほとんどの日本人が日本の力に全幅の信頼を置いています。しかしその反面、日本で最も嫌いなことは、そのサークルの外部に居る人間に対する日本人の非寛容性でした。私の日本体験といっても、それは通過………^{いつとき}一刻の通過ではなく、場所を通過しただけなのです。ナガター家と食事をした際も、バイクに乗って日本の街を走った際も、桜の花を絵に描いた際も、それは強く感じていました。私の体験から得た日本、それは日本の一部、否、ごくごく一部に過ぎないのです。今日も鏡を覗き込み、あの日（ロック・コンサートでの）あの人垣に私自身を見たように（今日も）鏡に映った私の姿の中に今なお私の内部に宿っている日本的な価値観の一部が、その大部分が映し出されているのです。